荻乃之葉

十九

詞を名せる事

[V. 33]

PL788
.4
.G4
1654
vol. 33
Copy 1
Asian
Japan
Lage

2004551302

38.

源氏廿九丈の三月より十月までの事なり（哈嚢甚来へ 夕ん）
れいそぶれ行まも寧ねの中ねいあずあがらまて
ほれくちさ心ちすなを行いおやしくまだ
心あずしさうわさぞうしおれがちまうちつくと
ちましば関もりのうちもわぬべきそうし紙ごひ
ふもり路ちうとさくあずし行ちずくいひとまろ
ついぬさ夜まごろもそむとねんずるもくるしく
ひころぶれ路妙ぶこしも（雲加心）おとぐのみすめ路しこくの（以）（中勢定くる）
すちとまきもあしぶちまのあまぶりまうえと
ちげうそおやさくそむさくまさみずがちる（地）
れもち恋ちりおとぐもさそころづまがり路し（以ん）
いどふけうしぬまおぼしわびてうれころやまも（中勢くる）

さやうにさらさらとて始なば。又とくあらためさひ
くづくりんほど。人のためもくるしき。ワがれかる
ざ面なりも人ワらもれてりなのびかしろぐ
さきことやまじらん。志のぶとすれどうちくの
こゝあやまりも世まりまるべしとくまぎら
りてれまけぬべきなありと覚しなりぬ。うへ（比）
つれなくてうしことけぬれ中（深とは）なれば。ゆくりなく
いひよくんもいかゞと覚しまぐりまて。ことくく
さくもてなきんもひとれさもんとろをとなり。
いかなりついでしてかれ目のめかすべきなどなば
すま。三月廿日（左大臣）胡目以後のなほこやのれ忌日（きまち）まて。

極(ごくらくじ)なるまおうで(ねん)なへり。あぐちこれひこさつれ。いさ
はひあらまはしく。上越アなどもあまるに糸つどひ
なへるに。宰(タ)ねの中ね。おさくけらひをとらず。よそは
しくて。かたちなど。こゝいはいこじ。ささりに
ねびけて。とりあつめ先で。こさ人の所有様なり。
このおとゝをばつしと忠実給しよ里。見て
なりも心づかひをられて。いといたうよういし
もてしづめてもれし給を。おとゝもつねよりはめ
とゞめ給。こゝ寸種などは六条院(源)よりもきさせ給へ里。
宰(タ)ねの君はましてこゝろげをとりもちて。おもれに
いとなつかしまつり給。夕かけてこれ人里給

ほど。蒸いこれちりこぞれ。霰(ケイ)こどくしきよ。おとに
せかし定しせて。な面めしうまそがさながめ
語。寧(タ)ねもあもれちるタのかしさよいとごうち
しありて。おまげなりと人ごのさりぐよ。ちをながめ
いりてねぬへり。こころ(ハリ)ときめきりこ語こしくや
まけん。袖(タノ)をひ(ハリ)さしまて。おどいとこよなくも
うしじしてまへる。かふ(土宮ノ人ニ入しるなれバ)のこのりの忌よ。もこぞ。
ねばさは。つこをゆしぬてこゝや。のうりすくなくなり
ゆくす忌の世よ。しひすてぬへるもうしこさも
べくなどのこまへば。うち(タ)うしこまりて。通りし
れ(土宮ノ)ともむけも。これこそしさすべさ面よ。うけ

給りをくこと侍しかど。ゆゑしなきれかしさる
はづかりつゝなどこそこゝ給。比こゝろおはそこしさ
あまうぞる。これちりぐまさをひかりぬぬ。かん
いかるそて。例なしぞ。以ノ給つゝんなど。よ
とゝもる心をかけたるれあたりなれバ。もうなさ
ことなれどこゝとゞまりて。とやうやとおもひ
あし給。地こゝろの手代のたひのしるしよや。かれ
以おとゞもなづりなくそしよりつゝ。もうなさつい
でのけぎとはなくさすがよつきぐしゝんを
おぼすま。宮月のつゝちごろ。以ノおまんの夜の茶いと
かゝしろうささこゝれて。かれつゝの夜なしぞ。こゝ

しこすぐさんことおしさきりなるりお
そびなどしぬて。蓍り程のいとゞ夜まきれるに
乳(拍)中ゆしてれ(はノタヘ)きうそこあり。一日の茶(極乗ちくす)のげ忠
対面あるずおぼし侍しをれいと面あしがたちより
給ふんやとありれ。ふうまは
(は)ほゞ宿の殿の夜こさそそれまたづねやへ
こぬ長のながりを。げ(地)まいとおもしろさ枝につけ
ぬへりまちつけぬへるもそろときめきをしれて
(タム)
りこまりさて給
(タ)なくまありやまどゝんふぢの茶そそれ
どきの夜どくしくいとまして。(河)たちおしくこそ

おくしまれ。どりなをしまへよとこさて給れ（柏詞）
ともまこそとのゆへば。ワづらりしきずいぢんも（柏と云へ）
いなとてへし給。（源）却とぐのおまへまて。（夕詞）うくなん
とそゆしんぞきせ給。（源詞）ぢやうあて抱しまへな
まやあらん。さもすこしも此し給ちぐこそは。すざ
（大家ノ事）ましうたのけうちなりしうしこもとけめとの給。
（此）ゆ心をごりこよなうねたげなりざし（夕詞）も給しじ
多いのまへのふぢつねよりも面白く咲て給ちなを。
ぢげなるころほひなれば。おそびきんなどこや給らん
どゆ給。（源詞）ぢどつひさられたりけるをもやうもの
ぢゆへとゆまし給。（ん）いなるんとしたくまいらるしく。

くちからず。ねもしくそあまりこゝろびしあれ。
非参差(ひさんざ)のほど。あまりにあきさは人々に。かくおもひは
なけれ。ひきつくろひやうに。びはひくの心こと
あるみえ。あそめれぞもぐしてれとをまもる
きて甘れ絃。びはれ方まそころづひいらしく
けさうじて。ふそれもすゞしき心やましき所じら
まうでめくり。おやじの気づち中ねどもしめて。
七八人うちつれてむく入れまうゐ。いづれともなく
おしきさうちどもあれど。おもひとをすゞれて
わざやまさうしあう拙しあうしうしづき
ぶしげるり。わくにあましひきつくろひをあど

し給。れよういをろうるゝぎ。れうゝゐるもなどし
なて。出給とて。小詞のまのけうき女房などに。のぞ
きてこゝへいとうさくにねびまさう人(タ)なり。
よういなどいとしげうに。抽しきやおぎやうにぬけ
いでおよすけさうゝにちく(深)おとゞにもまさる
ざ庵にてあれ。うれいゐぐいとをちにな庵
めしうあいぢつきて。こうにゐましく。世中に
すゝ心ちぞし給。おほやけぎ庵も。すゝしこも
れて。おぎれさるゝなりし。ことりぞうし。うれ(タ)い
ざえのきもまさりこゝろもちゐおくしく。すく
ようにひとりと。世にそしてありなどのなて。

おほえさまいれはあそびし給。おとゞはたゞあるく
そうしをひとしのそ。そゞろかしくきね思り
給ヘ。（夕）さゝろしていくすまひあやめり。家え（源詞夕）
すゑの世にはあまりまで。おとめのこゝろのゆうそくは
物し給めれど。よそひかりぬる人。おほえひすて給
あんつかりけつ。（夕ノ時頭を云）殺（えんやく）籍（さく）にも家（り）礼（れい）といふこそある
べらや。ちるまじしのそしへもよく見しきこんと
ちひのまつをいくつか心あるやうし給とうしきこえ
べくあんちなどのつて。さ（地）ひちえにやおうしこえ給は
気色ばず給。（夕詞）いつでかむりしせ（九大臣大宮ノ事）。世の人ゆるされりこえ
どもこは。男をせつかさ後にもとこえそせらる人きり

ゆうをいかなれんじあすとしよりはもべくん。
もとよりをろかあるころのをこよりまこそと。
うしこまり字に給れ（ね）ときよくさうどきて。歳乃
うゝ紫のとうちぜんじ（ぬ）へる。れ気色を給りて
（柏）臥中ね。菜の色こくことゝふさあるべきをありて。
（タ）まらうとのれ盃（さかづき）にくもふ。（タ）とりてもてあやむる。（ね）おとゞ
（ね）むしさ紀にかゞとしいかけん歳の菜まいより
すぎてうれるそれども。（タ）寧ね さうづきを持（とら）あるべく。
そしきぢりもいしまりぬへる古歳。いとよしあり
（タ）いくへり落けき表をすぐしきて菜の
ひもとくありにあふくん

夕ノ柏
歌中ねぎまゐへば

柏
こをやめれ袖ままかへる萩の葉見るひと
がしや夏もまきしんづ池ぎくまこれぜむなすゝ
先れど忍ひのまぎれてりちかぐしうしぞ
酒ノ方
これよりまきしぞ七日の夕月夜（ゆづく）かげ明の
かなりて池のごこのどるまゝすゝけれりげ
まぐ明のなり来ずゑどもの さりぐしきこゑ
なりまいとりしなげ来ばこゑれこり松の
来ぐゝ明どまいあしぬまゝれり葉のさ面よの
つゝなしずおもしろし例の寄のかね（柏ノ方）こゑいと
なりしくておしかきをうゑふおとぐいと（訶）けや

けりもつうまつりかれと打こぶれかて。としへに
けりこの家のとうちくもへぬ人。はと思いと
おもしろし。おしこほどまこぶりがちしきは
あそびまて。抱もひのそこずなりぬめり。やうく
夜ふけゆく程に。いたう重なやこをして。こぶり
心ちいとこへがたうて。まうでん重もほどくしく
こそ侍りぬべかれ。夜ぬ前ゆづり給てんやと。中ぬに
うれへ給。おとこ。朝臣や。はやすこ前もとめよ。おこな
いたく思ひすくこて。ほしいなれば。まうり入ぬといひ
まそくいりぬぬ。中ぬ。柏詞 菓のこげの挽ねよ。いまぞや
くましきしるべまぞ侍やといへば。松 夕詞 にちぎれりは

あぐなる蒙りは、ゆくしやとをめ給、中(柏ん)ねいこころ乃
うちは、ねるのわざやとさふ前あれど、人ざ夜のさふ
さ夜はめでたきまゝうもありてなんと、こころがけ
わるゝとなれば、うしろやすくこちびきろ、おとこ(タん)
ぞは、養うとおぼし給はも、わが(地)身いとゞたげうし
くぞ覚しおひ久しく、女(雲ね)はいとまづしとさひ
しきてもれし給も、ねびまされるは有様、いとゞ
あらぬ所なくめやすし、世のる(夕詞)先しはもありぬべ
うりつる身を、こころまでこそうまでもおぼし
ゆるさるめれ、志をしり給いぬもさ夜ことなるつぎ
れとうしこ罪し給、かね(柏ん)のすくしいづしつる、おし

ぐきのをもむきにとどめ給つや。いつきぬし
和くかもぐちのとそ。さしいへまほしかる
つれとのぬへば。女いとゝきこくしとぬぼして
あきき名をいひなぐしけり河ぐちもいかに
もしく関のあらぐき。あさましとの給ま海。いと
こめきたり。すくしうちひひて
もりはけりくきぶの関をかぐりのあさきま
のこいおふをざくなん。年月の川もりもいとまり
なくなやましきま。抱おぼしずと思ひまうちて。
くるしげまもてなして。おくりもしくぞかはなり。
ひとぐきてしぐしふを。おとぐしたりがはなすか

あさいかれとしがめ給。タされどありしもそぐぞい
で給。ねくされのあさがこなかひあるりし。
此文(法約ノ)にある紙志のびらりつつさ夜のころづひまそ
あるを。中(雲ヌノ)くそふにえ罪し給ものを。抱いひさがるさ
ごごちつきしろふる。おとゞ(ハ)りてこ給ぞ。いと
ワりなきや。つき(文詞)せざりつつれなしきり。中くい
とゞ志志しるし身のほどを。こへぬころこまる
きしぬべきを
とがむ(タ)ある志のびるきほうてもこ(とイ)をこそふ
あしもるし袖のきげんを。など(比)いとなれがほなり。打(ハ)
きて。手(詞)をいとゞくもうきなれにけるれなど

の給もむ(だ)しのなぐりなし。此(書)返しいといでさ
ぐるげなれば。ゑ(ゆ)ぐるしやとて。さもなばしちぐりぬ
べきことなれば。けうりなぬ。此使のろくなべてなしぬ
さ後はなへり。中(柏)ねなしさき後はもてなし給。
つねはひさかくしてうくろへあるゝさし此川ク
ひ。そふてなまちなど人ごしくなまふなり。
お(タノ住名ニ)とのぎうなる人の。むつましくなばしつゝひ給
なりけり。六条のおとゞも。うくとさうしめしてぞり。
宰(タ)ねつるよりもひかりそひて来りなへれば。うち(源)
まもりなて。げ(河)さいいかなふかなどもれしいや。
さしき人も。女のすぢまはこぐるゝゝなしあるを。

人はうらづらひ。こゝろいれをですぐされたる
なん。すこし人まぬけたりけるはこゝろとおぼしけな。
はおとゞのはをさてのあまりすくこそ。ちぎりなく
くげなれ給ぬるを。世ゝ人もいひいづることあらんや。
さりとてもはゞ方たけ。志がなほ心をごりして。
すきぐ志き心ぢんなどもしし給ふ。さてそお
はしなほきなる心をさてとこゝゆれど。志をの
心ぢんおくしうぎくをありて。人君しまくき所
つきぬへる人なりなど。れいのなしへきうしなふ。
夕と雲内
ことうちあひめやすきはあるひとおぼさるはす
とも。こゝぎずすくしうこのうこぢうりとこゝし給。ほゝ

ほりてはかるじ　ほをうけしとりうるかと見
ゆるをおまへまてはさ海ぐあれめでことこそ語
へり　添おとぐはうすきれちをしおろきれぞのうら
めさうるが　もんけぎやかなつやくとすきうるを
まりて　れつさをずあてはち海めしうかりしまず
宰相殿はすくし　多かりきれちをしは丁子ぞめれ
こゞろまでしめるおろきあやのなかりしき紙
きめへることさしめきてえんはこれ　四月分　くれん紙おて
まりて　れ導師をそく無りそれぞ　日くれて　清
うるぐより　けしまんいぐしふをるど　おほや　宣
ざ海はかもしず　こゝろぐよしのへ望　清まへ忠

さほうをうけして。まだ遅ちども年りつぎひて。たまる
ちりうりしされ前(こぜん)よりとも。おやしう心げかひ
きれておろしがちなり。宰(タ)ねは志げこころちく。
いよくけさうじひきつくろひて世給。けざとな
らひどちさけぶちは給けるへはうしめしと志ふも
ありなり。年代のけもりとりそへて。志ふやうちる
れちくひちめれば。うづももしんやし。おるじ志
おとぐもいとぐ志きちりまさりをうけらしき物を
おぼして。いとじうもそてうしづき男給。まけぬるを
のはおしさは程おぼもどつこも物るまじうぞ。おめ(タノ)
やりちるれ心ざ面ちどの。年代こと心ちくて。わんじを

がしのへるなどをおりがたうそしゆうす。女れ（さぞん）ぬれ
有様などよりも。雲（雲力ノ）やうよめでたく。おしまほし
それが。水（四宮）方さふらふ人ぐちどは。心よりしぞしひいふも
あれど。なまのくるしさとかあらん。おぞちの水（雲力ノ母）方
などもかうかうなまてうれしとしさそして給ひ。
うくて六条院のれいそぎは。女よ日のほどなりかり
さいのうへ（雲）ゝあれよまうでのふとてれいのれ（女ヲークミ）かな
さいぐちひきてのへど。なりくさしもひきつぐ
きて。心やましきを見して。これもくとまゐ
のてことくしさほどよもあらぞれ車女だりを
まてれだんなどもくぐしさ人ぞおほくも。

あらず車そぎたるまをけるひことなり。まつりの（ガラ成まつりこ）
日のあらつさまあうでのて。人さまは拘れしんぞ
べきれさじきまおもしまず。れうさぐの女だう。
をのく車ひきつできてれまへところぐしめ
たる程いるめしうれいそれとそをめよろも。おどろ
おどろしきれいきほひなり。おとぐそ中（係ム）（秋好）ぞのれ
母こやまだ前の車をしさはこれあへりしおりの
こと見しまて。時（係詞）まるころをぞりして。さやう
なることなんなきけなきことなけるこまなくとひ
けらたりし人（蓑）もなげきおしやうまてなくなりま
きとその程への程々ちて。おりとまれる人ども。中（ケ）程

くさ人まで、まづ、まゐりのぼるめるも、こゝやはちまう（私好）
ひちまさすぢまて、おかしするも、おもへはいとこそ先（あれ）
なれ、すべていとさぶめるさ世なれどそ、何ぞすも
せふまゝまて、いけるかぎりの世をすぐさ海かし
それど、のこり（紫ノ）給はんすゑの世などのことしへなさ
おさろへなどとさへ、さひたゞかゝるれどとうち
うちひなて、上（地）ぎるちどもれさじきまゝ来りけどひ
一なへれば、そ（添）ちるゝは出なぬ、近傍づゝさの後は、臥（柏）中ぬ
ちりそりかれ大（以）殿まて、出さろ取りぞ人ぐは来り
給ける、さう（惟光類）ちゐしのすけもつゝひちりそり、おぼえ
ことまて、問（冷）表家よりもじめまりて、六条（添）院ちなど

よりもれとふしひどと所をさまぐれこころうを
いとめでたし。宰相の中ね。いでたちの所りさん
とふしひゆへりうちとけずあられをかはし給
れ中なれば。かくやんごとなきなまさぐまり
給ぬるを。ただなしずうちしひかり

ちなきやかふのかぐしよかしこのぼめ
くまでもなりよけるれ。おさましとあるを。
ありすぐしたまもねばりを。いかぐおもひけん
いと拙さはがしく。車よのうほどなれば
かぐしてもかしこどしなく菓の名ハかつらを
ありし人やしるしん。まうぞなしでいと罪しうり。

ちれかれど、ねんさいしんとおぼせ、お伝この
内侍（惟光娘）にぞせしちゐれずおもひまゐれぬべき、うく（源ん）て出
まいり（明石姫入内）にハ、ホ（紫）のうへそひぬべきを、つゐにあるがく
しくもえそひさふしひ給ましじ、うゐ川いでに、
れ出（明石上）うしろこをやそんましとおぼせ、うへ（紫ん）も
つゐにあるべきことのうくへぞアそせぐ給せ、
れ人（明石）もきれしとせひちげかるしん、この出（明石姫）こうる
にも、今ハやうくおぼつゐく衰におぼしせる
らん、うるぐ心をれましんもあいちしとおもひ
ありぬそ、この（紫詞）ありにそ人（明石上と姫恵に）ありぬへ、まぐいとあえか
ゐるほどもうせろめるきに、さふしふ人とそ、ゐる、

けりしきのこそあはれ。れめれとうちも。こゝを
よぎぬことの心いうかぎりあるを。こゝげかしも
えいとしもさふらはざしんほどうしろやすうる
べきときしぬへば。いと（源詞）よくおぼしよるかれと
そして。さるんとあ（昭和）るまもかくしひの給かれば。
いとじ（昭和ん）くうれしとしふことかるひ侍る心ちして。
人のさうぞくなるものことも。やんごとなされ有様に
をとりまじくいそぎたる。おまぞ（昭和ノ）ちん。なを（尼夫人）このれ
おひささこまんの心ゆくつけ。いまひとこゝび
こまり世もやといのちとさへしうねうなしてねん
じけるをいかしてかはとしふもかるし。その（昭和ニ）歌は

紫 う人さゝして寄りのつれて車よまちくだり。うち
おもしろかりし人々わろかるべきことをいかでめはおもひやく
くまず。うぢうくえがさきより給ふのさずまて。ゆかしかく
ありゝするを。かれいつくしう心ぐるしうおもふ。地 宮君 それま
いりのかゞしさ。人のめおぼろくぢらひしのしまはを
源ノ ドゝおぼしつめて。そのあはれつるの海
まぞあやめやかざりまあさきしつきすへなりあそ。
紫 うくいまいとゝあはれなりけりしやおもひそえて
紫ノ乳娘あぶとノへ 給まつけても。人はゆかりまじう。まちゝてりうろ
又 こともおしはかりおぼえ。源 うちくぢも。字おの意も。
紫ノ手ノあきらるまとそ うぐこのゝひとつならん。おもぬこゝろなるらん。

おほしける。三日すぐしてぞ。うへ(紫)はまゐぞさせ給。
たちかたりて(吟石ノ)来り給ふ。此(紫ノ吟石ニ)對面あり。うく(紫詞)おとなび
給けぢめなるん。年月のほどもしられ給れず。
うとくしきへぐてはあるまじうやとおぼしう
のぬて。地(地)抄給などし給。これ(吟石を云ヘ)もうちとけぬるもじめ
なあり。もれ(吟石ノ)などうちいひたるけいひなど。ほんべこそ
たくめざ(紫ノ)面しうこ給。又(吟石)いとけ(紫ノ)たうさうなるれ
かしきを。かたこまめでたしとこそ。そこ(吟石ム)の中にも
せ(紫を)ぐれたる(源ノ)れうろざしなりて。おほしびなきさ面に
さぐまり給けるも。いとことわりとしひしるに。
うまでたちなしびまゆる(ちぎり)給。そろうなりやハと

思ものからいで（些）給ぎしきのいとことなこそほしく
れて車などゆりされなて。如れのれありさ海（詳しくもあり些ノ事を云へ）
ことなるぬをもひくらぶるに。さすがなる男のほど
なりいとう（以石狗）いくしげるひぬなれやうなれ省さ海を。
事のこちしてこまるも。泪のことばまとぬる。
ひとつ袖とぞこしざりける。年ばよろづになげさ
たづこ。さ海ぐうき男とおもひくしけるいのちも
のべまほしう。ちれぐしきにけて。まことに
すこよしの神もをろかなるぞむしろ。（地）ふさ海
まうしづきまうして。こころをとゞめことなる。
おさくなき人のらうくしさなれば。大なるの

ほ
よをおぼしよりもじめおなべてなしぬれ（吟名姫ノ）ありさ海
うちなるを、家（長ブ）もワきれ心ちよいとうろことに
しひきてしぬへりいどこうしまへるれかくぐの人
などはこの母（吟名）君のうしてさふしひぬふをさずに
いひなしなどすれどそれにけうべくもあらぎ
いまめしくなるびなきことをばさしにもいたず
こゝろにくしあるれけちひをちうなさことに
つけてもおしまほしくもてなしきてしぬへれど
母ごんなどもめづらしこさいどこ家にて、とりぐに
さふしふんぐも心をかけうるに女房のようい有こ海
さへいとじくとのへなしぬへり。（生）うへもさうべさ

ありつゝ　はまいり給れ（紫と碧とノ）ありしまほしく
うちとけりよさり（碧ノ）とてさしすぎ抽なれぞ　おな
じゝりうべきもてなしもる露なく　おやしう
あし海ほしき人のれありさ海こゝろだへなり　（源）れ
とゞもなぐらぜのこゝおぼさるれ世のこゝなる
まとおぼしつゝれまいりのひあるさ海ゝこゝなる
なしぬてこゝろかしなれど世ゝうきこゝろやうにて
こゞろしりつゝ（夕）宰相の君もおもひなくめやすき
さ海ゝまづまり給ぬれば　れ心おちぬとてのて
今ハほいもとげなんとおぼしなる　ゝ海いの（紫）上君れ
ありさ海のこすてぐこさるも　中ぐ（秋好）なりしませぞ

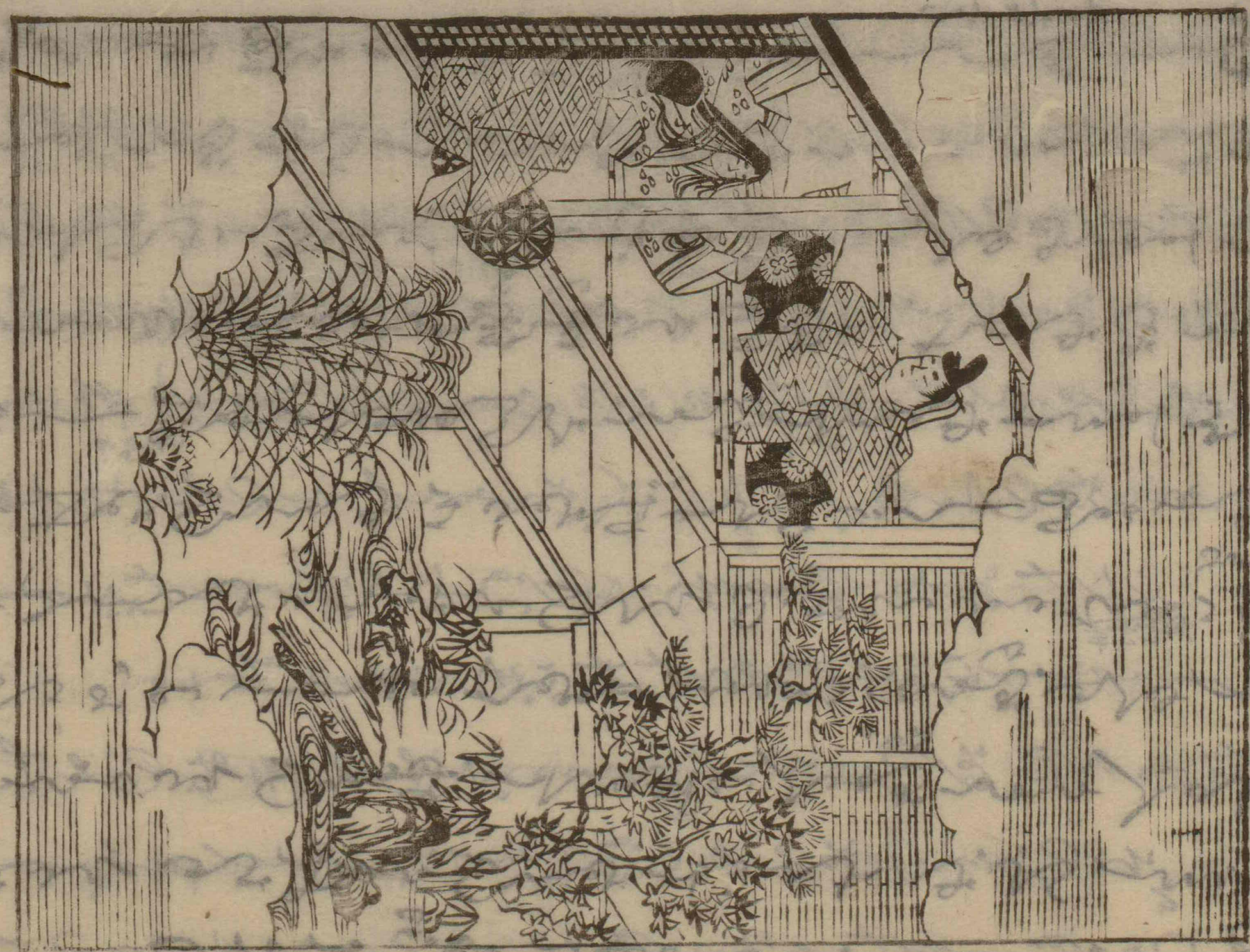
なるかなしぬれこころよをなり。この此(秋好)かたりを。
世よしられたる如(紫と)やざ海まは。まつしきてしぬるべ
かれば。さりともとおぼしゆづりかり。夏の此(花ちる)かたの
時ごよしなるやぞ給まじきも。寧(タ)ねの和しぬへだと。
これとりぐまうしろめたかしずおぼしなりゆく。
あけ(化)んとしよそ(源)ぢなりぬべかれば此紫のこと
をおほやけよりたじめ生りて。おほきおとる世志
いそぎなりその秋を(源)上天里(てんまう)まなずしふる此位え
めて。こふくもつまづきかうかりなどこれをひ給。
うらぞも世の此心よりなるぬことなけれど。なほ
めづしうりつる。昔の明とあらたまて。院(ぬし)目どもなど

なりざ海ことまいつくしうなりそひこまへば、酒(淨)は
まいりぬべきことうるべきをぞ。うゐはおぼし
けり。うくても れ あらず(冷)こうどいおぼして。世中を
もじかりて。位を(源は)ゆづり冥し給はぬことをなん。朝夕の
れなげきぐさ成けり。酒(以左注大臣は奴給之)大臣あがりなて。宰(夕)相中将。中
納言になりぬぬ。れよろこびに出給。ひう里いとど
まさりぬへる。さ海うたちよりたじめて。あかぬこと
なきを。おほじのおとゞもおほかく(宰ね ノ)人になされ
まじ。こやづくへよりもとおぼしなりて。君(宰ね)
多いふのめれと。六位すくきとつぶやきしこうねの
こと。(夕ん)もの〻おりくにおぼし出されば。さくのいと。

おもしろくてうけろひろなほきて
あさこどりけり紫のきくをなまてもこき紫の
色とかけきや。詞 かしかりしありのひとことだこそ
けすこれはといとまほひやかほほ思えてこまへ里。
大輔ノあれさん
とづしういとおしき物しうけらしうこなる
大輔乳母
あさ紫よりなくなかそのきくなればあきき
色もくなもなりきいこ詞 かまこころなくをこまへ里
けるまかといとなれてくるしがる。れ タノ 比 いきほひま
さりてかくれすまねもところせくれば。三条殿 大宮ノ御殿之 り
けるりあぬすくしあれまくるをいとめでこくすり
ちるしてこ大宮やのおりしまきし方をあしくめきけ

らひて此ゝ給むしおぼして。長にもふさ雨なる
れすまねなり。前栽（せんざい）どもなど。ちいさき木どもなり
しもいとしげきかげとなりひとむし鶯（ずき）もうろに
まうきてこゑれうけり。いくろを給やり水のみ
草もかきあらためて。いと心ゆきゝろしきなり。
おしさ夕（雲カ）菅のほどを。ふさ所ちがめなて。おさ
ましかりし世のれおれされ物語などし給に。
恋しきともおほく。人のもひりんこともちづしう。
女（書ゐ）ぞこゝはおぼしいづ。ふるべどものまうでちらぶ。
ざうしぐまさふしひけりなと。まうのぼりあれ
まりて。いとうれしともひあへり。おとこ（夕）君

あ（夕）はれこそは岩もるあらしに人のゆくゑハ
まつやなどれましるか。冬ぞ（雲か）
あすき（雲の）人のけづまえずつれなくてこゝろな
やれのいはねの水。おと（せ）ののふけどはおとく
うちよりまうでゝ給けるを。紅葉のさまはかなこゝろ
くされて。ハくりめへる

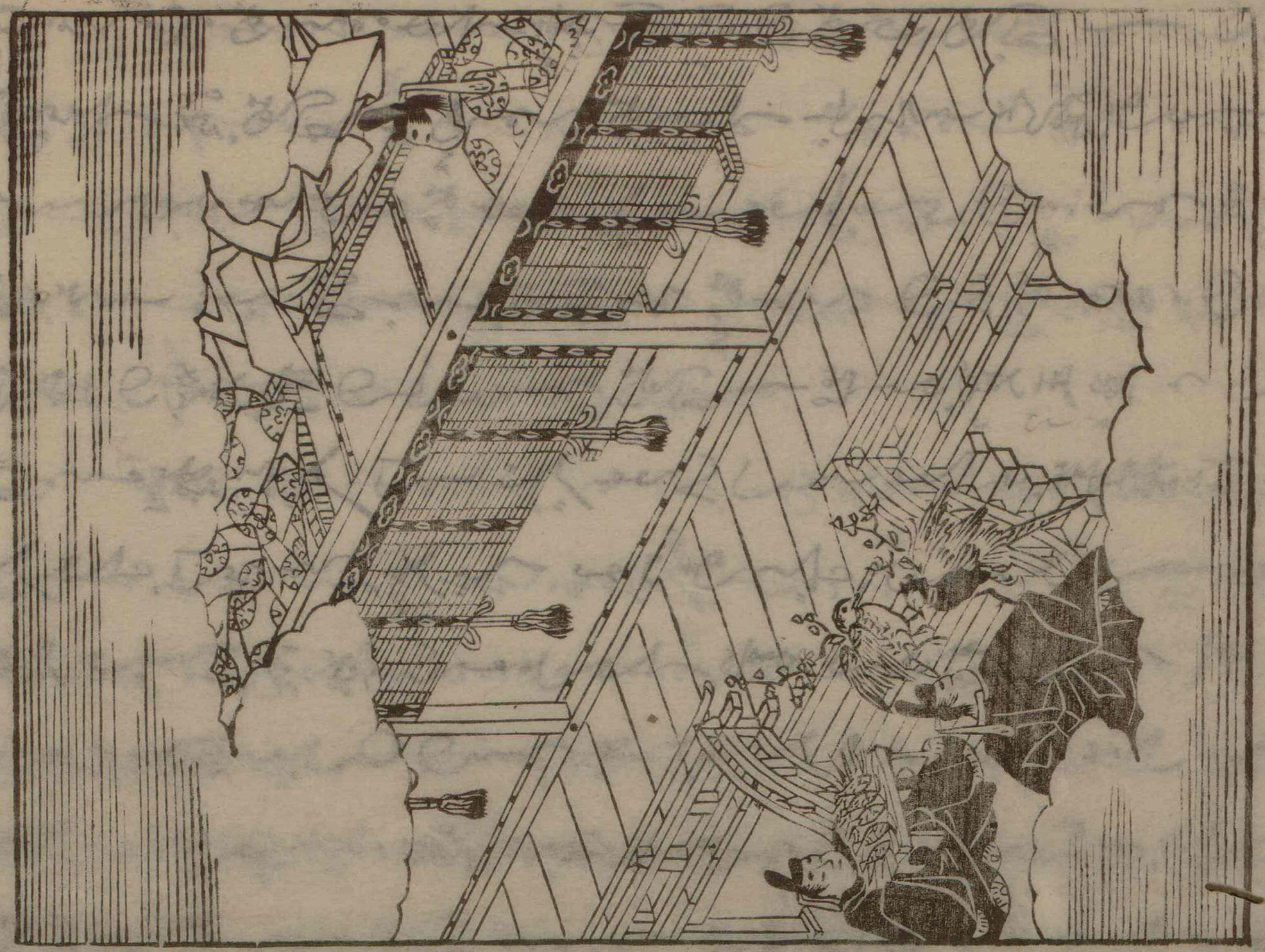


ひ(ハ)しおもしまいしはあるさ海なりも。木
さわさかくることなく。おとりくいとおとなし
くすまねのへるさ海。茶やかなりとこ給につけても。
いと抱あたれはおばさう。中納言(タ地)もかしきことは。
かすてあるそ。いとゞさびまりてもれし給。
あしまはしくうめくしげなるはあたひなれど。
女(志カ)はまたかるかたちのこゝろもなどかなりしんと。
こゝのへり。おとこはこゝろもなくまゝしはおかす。
かるべどもおもへ(ハ)は所えて。神さびたることゞも
こゝろいづ。ありつゝれてなしひどもれちりたるを。
ゆ(ハ)んゞつけて。うちさはれ給。一(詞)れ水のこゝろ

さぞ○まほしけれど。おさえれいとといふしてとの給
そのこゝのおいまはむべもうちぬんうへし
こ松もうけおひまさり。おとこぞみの宰相のめ此
とうゝりし此心もいとれねば。志うりがかま
いづれをもうげとぞこのむふる紫よりねざし
うもきる松のすゑぐ。おいべぜもうやうのすぢま
家にあつめうるを。中納言はおりしとおぼして。女君も
あいるくおもてあうして。くるしとさく給。神殿の
此日あまりのほどに。云条院にも。御紫乃
さうりまて。けうあるべきさびのこゝろまるに。朱雀
院にもれをうそこありて。院さへいうりおりします

べかれば世に免づしくありがたきことなりて。
よの人もこころをおどろかす。あるじの院(源)がたも。此心
をはらし。めもあやなるまうけをもさせ給。
この時にもぞ誓ありて。まつむまぢの殿(との)に。左(さう)右乃
つきのゆむまひきなんべて。左右のを湯たちそひ
たるさほうの月のきちにあやめもられぜかうひ
たりひつじくぐるほどに。これこのさん殿(でん)にうけ皇
おりします。こちの程そりもしはる殿にいましき紙
しきおしいなるべき前にいきんしやうをひきいけ
らしうしれさをぬへりひがしの池に母どもうけて。
こづしどころのうるひのおさ。院(朱雀)の鵜(う)うひをめし

なくべて。粉をなろさをこまへりちいさきかれども
くひこり。ぐさとれかくんとはなけれど。すぎさせ給
こちのけうぢりまなん。山のもみぢはいげうこを
をとゝねど。ましのなまのへは心ことなるを。中の
ちうのへをくげし。中門をひしきて。きりのへぐて
なくてかくんぞさせぬふ。御座かたけよそひてお
なじのれ座はくぐれるなを。をんじまてなをさを
給ほどめでこくこくこれど。こかどは私かぐりあり
いやくしさをけらして。こをなり給もぬこと紙
なんなばしける。地のうをしたのかねとり。蔵人所乃
こうぐひの。小野まうりつうまけれる。さりひと



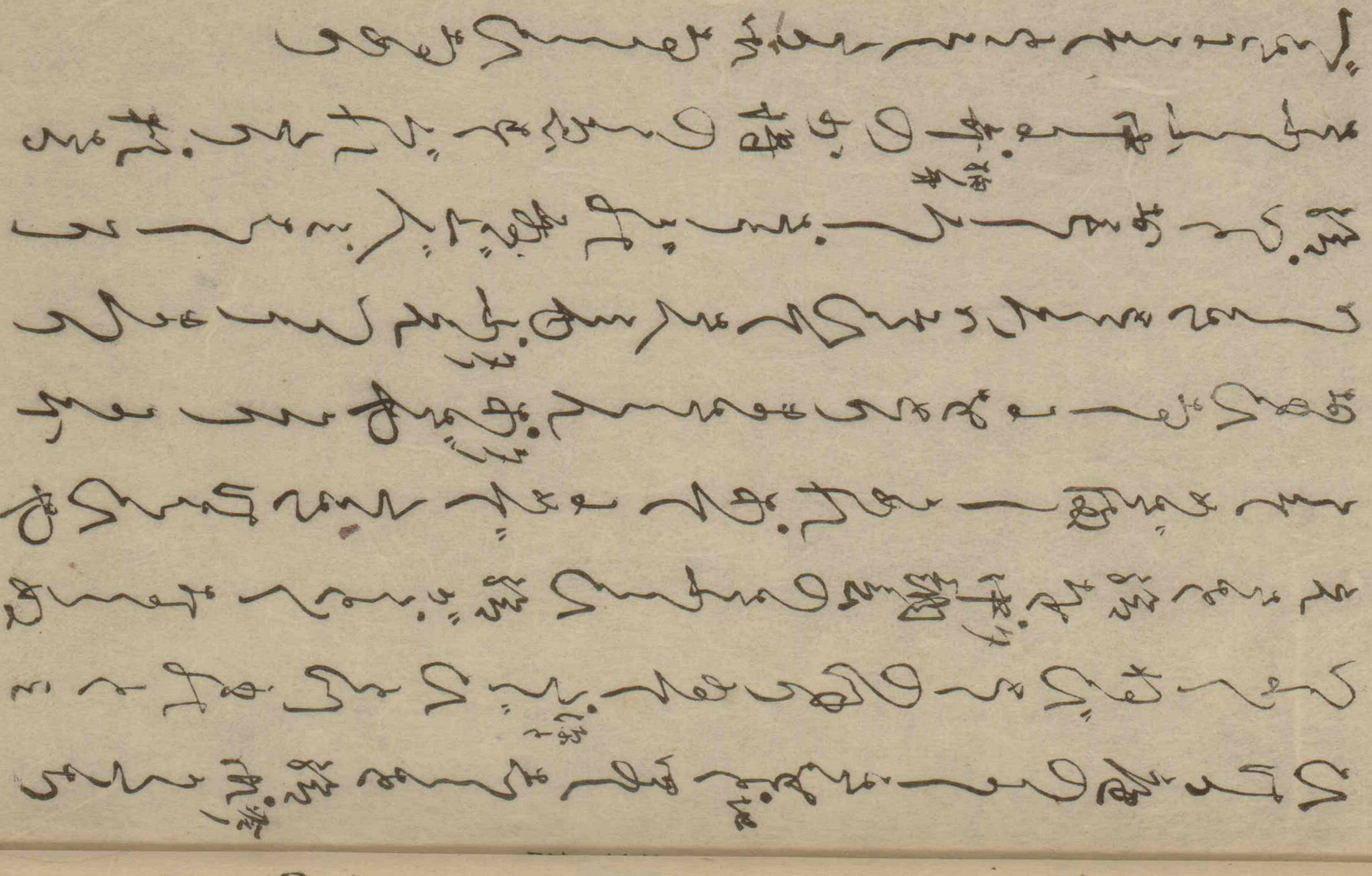
おほきおとゞ。おほきさいかなしうしてれ
まれなるかうゝこ遊ゞら舞なとのれまうけものゝら
もとき使につけのことゞもせそへてつかうまつらるを
めくられれ思ひなちうて兼うろ将なゞく所の
人めずうゞとれ大ゞくないあしずなすまめしき
ほどな。舞どへワろゝへまひつうまつう。朱雀院の
紅葉の賀。御のかうことおぼし出る。賀王恩といふ
まえうすうほどな。おほきおとゞのれおとこの十
だうりなる。きちなおほしろうまふ。うちのきうどれぞ
ぬぎて給。おほきおとゞおほうてぶゝうを給。おほゞしの
院。ゑくとおもしろきて青海波のおほうおほしいめ

夕まさらまがきの菊もありくに袖折かくし
秋をこふしし。おとゞそのありはかなげ舞にこち
なしび笑し給しを。これも人に付せぐれこまへ家
身なげしなをこのさとくこまなりける極覚し
しらう。時毎ありしりがかなり

紫の雲にまがへるこさくの菜にごうなきよれ
ほしかとぞこう。時こそ来れとこさて給夕風吹き
くもみぢの夕こうさうすさましこさをしこさ
ける夜のくへこまがふ庵の面にくちありしきに
らこんべのやむごとなさ家のそぜなどこそおほさ
わらさしつうぢこ。ともうえび深なとつまのごと。

例のいしうりひさいぢり氣色をこそてこじりさ
地どもをほのゝ鐘にけり。江葉のげりかへる
いりほど。日のくるゝもいとおしげなりぐく所など。
なごろくしくいとず。冷 うへのれあそびだじまりて。
ふむのつきのれことじもめす。地のけうをちなる
ほどにれ前にこれれことだまいれりぐの法し
のきしぬこゑも。朱雀院いとめづしく衣に
こそしめす

朱雀 私なへて時雨ふりぬる里人もうるもみぢの
おもそこゑ。地 うしめしぐるぞおぼしるや。こゝど
冷 よれつきの江葉とやこういうへのこゑしに



69038
6 Ap 78